武田先生の思い出

－「市史編纂」のころ－

土　屋　賢　泰

親しくその声貌に接する機会をえて、いらいながきにわたって、ご指導をいただきました。いつのまにかいつも身近におられるとおもいこむようになっておりましたが、今は記憶のなかの先生のお声に耳を傾けるのみであります。

先生の言動に熱気をかんじた仕事はいくつも思い起こすことができますが、「千葉市史」の編纂もそのひとつでありました。先生をチーフとする「原始・古代」では、原始時代は勿論ですが今回力をそそいでみようというのが坂東武士団の成立のなかでの千葉氏の成立についてであり、千葉氏の守護神妙見の信仰についてでありました。

当時、調査員として加えていただいた私も、勤務のおわった後、加曾利博物館に集まり夜おそくまでメンバーの議論の仲間にはいったものでした。

昭和46年の夏休みは、妙見信仰に関する畿内の古い遺跡をたずねること、河内源氏の河内石川の庄の跡をたずねること、千葉寺は僧行基創建の伝説をもつことでしられるお寺ですがその行基の遺跡をたどることでした。

先生のお人柄や学識、歴史研究への情熱といったものをほんとに身近く感じた旅でした。

この時の「旅日記」をひもとかせていただこう。

7月24日はまだ梅雨のあけきれぬなかを奈良へ、天理大学参考館、石上神宮、和爾下神社等へ足をのばしました。夜は東大寺山古墳出土の鉄剣銘、石上の七支刀について同行の田中彬雄さんもはいっておそくまで話がつきませんでした。

25日中宮寺前で下車して徒歩20分、法輪寺へ。住職村上慶世氏にあう。最古の妙見像を拝して寺史をきく。すでに石田茂作、野尻抱影二氏の研究あり。住職の三重の塔再建、飛鳥三塔復活の熱意にふれた。ついで法隆寺文化財事務所をたずね片岡傳夫氏に会う。とくに伝来の七曜剣および銅剣、星曼陀羅について、また若草伽藍の跡について説明していただき見学する。折から法隆寺夏季大学の開講の日で、にぎやかな人声にあふれていました。

26日春日奥山地獄谷聖人窟をめざす。営林署をたずねて鍵をかしていただく。春日山石仏付近で下車して谷にはいるがまもなく深い霧にたちこめられて一歩も歩けなくなる。霧の晴れるのを待って聖人窟へ、滴りのなかに線刻七星妙見菩薩にまみえる。この日霧雨の降る中、私たちは千年斧を入れないという奥山の原生林のなかにいた。帰るという言葉をなかなか発しない武田先生、夕方近く宿にかえった私たちのズボン下は血だらけであった。この日足ごしらえの

十分でなかった私たちはあの高野聖とおなじように山蛭にあったのりではないだろうかという思いが今もときどき頭をかすめます。

27日太子町にある河内の妙見寺をたずねる。日本霊異記の妙見寺に比定される寺である。昔は北方の信夫山にあったという。河内蘇我氏のおこったところである。叡福寺をへて推古天皇陵等をまじかにみながら河内源氏の氏神壷井八幡宮の宮司高木家へとむかう。河内源氏の祖頼信が石清水八幡を石川の庄に勧請したのが壷井八幡である。重要美術品太刀天光丸、重要文化財楯無しの鎧、八幡太郎義家が奥州に持参したと伝える旗等が大切に守られている。氏寺通法寺跡、源氏三代の墓はブドウ畑のなかに点在しておりました。開発と文化財保存という課題に直面しているとのことでした。

28日堺市津久野の行基生誕の家原寺をたずね、行基四十九院のひとつ大野寺にまわり、あわせて史跡の土塔をみて当時に思いをはせました。大野寺は「行基年譜」の七二七（神亀四）年にこれを起こすとあり、土塔からは同年をしるした屋根瓦が出たという。生駒山麓の竹林寺をたずねたのはずっとのちでした。漠然とえがいていたいろいろのものが、とつぜんまじかくなった旅でした。また、一日の行動にはいるまえとおわったあとのコーヒータイムは先生の日課でありましたが、充実と反省のための区切りとしてよいものだとさっそくとりいれだしたしだいです。

駅頭で帰りの「ひかり」を待つ私たちのそばにはお元気だった先生が立っておられました。「どうだ、疲れたろう」といつもの言葉を発しながら。

もう残りすくなくなった人生、悔いのないようにおくります。

先生のご冥福をお祈り致します。　（2002. 2. 8）

（本国寺住職）